

転輪聖王 ―女宝を所有するもの―

福田 琢（同朋大学）

転輪聖王あるいは転輪王（*cakravartin, cakkavatti*）とは、仏教説話をはじめ、インド古典の神話的記述にあらわれる世界の支配者、理想の統治者である。その起源はおそらく仏教よりも古い、確実に仏教以前であることを証明する資料は未だ発見されず、今日では、阿含・ニカーヤを中心とする仏典が、転輪王に関する最も古く豊富な情報源とされている。

仏教文献において、転輪王は常にブッダ（釈尊）と関連づけられている。『スッタニパータ』（*Sn* 552-557）や『テーラガーター』（*Tha* 1243-1237）などの韻文経典は、ブッダの偉大さやサンガの威容を転輪王とその兵軍に喩える。あるいは「三十二大人相をそなえた人には、世間の理想王たる転輪王になるか、出世間の法王であるブッダになるかの二つの道以外はない」と両者を同等の存在とする（*Sn* p.106）。

長部経典 17『大善見王経』（*Mahāsudassanasuttanta, DN* 17, vol.2）は、ブッダ入滅の地であるクシナーラーを遠い昔に支配していた大善見（*Mahāsudassana*）という転輪王の物語である。彼はブッダ自身の前世の姿であり、転輪王に相応しく輪宝、象宝、馬宝、珠宝、女宝、居士宝、將軍宝の七宝を所有している。うち「女宝」（*itthiratana*）は、人間の容色を超えた天人の容色をもち、常に王に付き従う女である。

大善見王はそれら七宝をはじめとするさまざまな財に貪著せず、ダルマと名づけられた専用の宮殿の中で、数百年にわたって孤独に三昧に専念し、慈悲行（四無量心）を実践する。やがて梵天に転生する時が近づくと、八万四千の妃の首である女宝、善賢妃（*Subhaddā devī*）がダルマ宮を訪問し、王に向かって、まだこの地にとどまり長寿を全うするよう涙ながらに懇願する。しかし彼女は逆に、俗世に執着することの愚かさを王より教え諭され、その死を容認するにいたる。

大善見王は、世間における最上の王のみが得られる七宝を所有しつつ、かつあらゆる欲望を完全に棄捨しており、それらにまったく執着しない。その在り方は、無所有の生活によって欲望を超えようとする沙門たちの生活態度と対照的であり、大乘仏典に登場する在家菩薩たちの生き方の祖型ともなっている。一方、その死にあたって設定された善賢妃との長い別れの場面は、王が王として世を去るためにはそれを看取る王妃の存在が不可欠であること、言い換えれば、たとえ性愛を完全に断じていても、転輪王は転輪王である限り「男性」という文化的コードに組み入れられている事実を示している。

転輪王が男性でしかありえない以上、同様に三十二大人相をそなえた出世間の王たるブッダも、また男性にしか成りえない。ブッダは必ず男性でなければならない、という観念は、必ずしも転輪王との結びつきだけから発生したものではないだろう。しかし説一切有部の初期文献『因施設』（チベット語訳と部分的な漢訳で現存）に説かれる、いわゆる「女人五障説」の内容を検討すると、この説は本来「転輪王と仏（と独覺）は特別であり、女性には成れない存在である」という主張が核となって、そこに「梵天と魔王」が付随的に加えられることで「五障」となったのではないかと想像される。

本発表では、以上のような観点から、転輪聖王の観念がジェンダーをめぐる仏典の言説に与えた影響を考察してみたい。

〈キーワード〉 大善見王経 因施設 転輪聖王 女人五障